

教育・研究・地域連携の一体的推進事業 実績報告書

責任者氏名	浅川泰宏	所属	共通教育科
-------	------	----	-------

民俗学「セタウィーク！」の地域連携展示：
学生製作の七夕飾りによる地域社会の非日常的な景観の創出

1 事業活動の実績報告について（2026年3月末）

「概要」

教養科目「民俗学」で2019年度より実施している総合的課題「七夕飾り」製作の学習成果公開「セタウィーク！」を地域連携プロジェクトに発展させ、実施した。

本活動の目的は、下記の3点である。

- (1) 教育活動 民俗学的手法による地域理解の方法を学生が実践的に習得すること
- (2) 地域連携 学生の学習成果を地域社会に還元し地域の賑わい創出につなげること
- (3) 研究活動 教養教育としての民俗学の可能性を学術的に検討すること

民俗学は、近世の文人による民俗の発見に端を発し、近代に柳田國男によって本格化し、「野」の学問として発展してきた地域理解の学である。保健医療福祉も人や地域と関わる領域であるという自画像を持つ。本プロジェクトは民俗学と保健医療福祉とを「地域」を結び目として接続する。具体的には「民俗学」の授業において、学生がそれぞれの身近な地域の民俗について、「聞き書き」や図書館・博物館の郷土資料の利用などアクティブラーニングで理解を深め、その成果を「七夕飾り」で表現する。2025年度は、これまで学内で実施していた作品発表を、学生と教員が協働し、せんげん台西口地区の商店会と連携して、七夕飾りの学外展示を行った。

「活動実績」

①教員と学生がともに取り組んだ方法

民俗学（前期開講、全15回）の受講を通して、学生が地域理解の実践的な方法を身につけられる学修プログラムを設計した。教員は、食、年中行事・祭り、異人、妖怪、民俗宗教などテーマを講義し、学生はこれらを受講しつつ、小課題で公共図書館・郷土資料の利用、聞き書き、フィールドワークを実践した。学びの成果は、小型ホワイトボードを用いた教室内でのディスカッションや地図アプリの活用による民俗の多様性の可視化など、教員と学生同士の協働を通して共有した。

この学修プログラムによる民俗学の知と技法を修得の集大成が、総合的課題「あなたの地域の民俗を取り入れたオリジナルの七夕飾りの製作」である。5月中旬からの約1ヶ月の研究・製作期間で、学生は自らの知的関心から設定した「地域」の民俗を調査し、その成果を元に、①作品（七夕飾り本体）、②解説書（取り入れた民俗の説明、調査方法、製作上の工夫などをまとめたレポート）、③解説動画（作品のポイントを15秒でアピールする口頭発表）を製作した。

教員は、上記の民俗の調査や七夕飾りの製作を指導すると共に、全ての作品にとりつける電池式LEDライトの準備や、とりわけ春から新しく一人暮らしを始めた学生向けに、基本的な工具を揃えた製作支援パッケージの整備などを通して、学生の主体的な学びを支援した。

②地域に根差した（教員と学生が地域に入り込む・地域住民と関わる）活動内容

完成した作品は、せんげんパークロード商店会と千間台西口商店会の協力を得て、同商店会主催の地域イベント「せんげん台七夕祭り」（7月4日（金）、5日（土））で展示した。

同イベントは、小学生の願い事を書いた短冊を飾り付けた笹を、参加店舗（2025年度は約40店舗）に配置することで、地域の交流の場を創り出すものである。ここに民俗学で学生が製作した約100点の七夕飾りを分配して設置し、「小学生×商店会×埼玉県立大学」という、せんげん

台ならではの乗法的なつながりを生み出した。

こうしたつながりの発展は、作品の梱包・搬出時に、作品の組み立てや飾り付けの説明書や挨拶・御礼の独自のメッセージを添えるなど、より主体的・積極的に地域と関わる学生の姿勢にも見て取れた。また、飾り付けを担当した商店会の皆様からも、作品のモチーフとなった民俗の読み解きを楽しんだなどの声も頂くなど、予想を超える成果を生み出した。

また、この点で重要な働きを担ったのが、本学学生サークル「和装部 和の美」のボランティア活動である。和装を通じて七夕の雰囲気や日本の伝統文化の美意識を直感的視覚的に一すなわち小学生や未就学の子どもも楽しめる形で一伝えつつ、地域のさまざまな来場者の案内を務め、イベントへの参加を促すことで、先述のつながりの乗法的発展を拡大した。

③教育・研究・地域連携との関連性

七夕は中国の乞巧奠（きこうでん）に由来する年中行事である。夏の大祓から盆の死者供養まで、病・厄を祓い、死と向かい合うことで生を再考することは、伝統の学びを現代に活用する教育的価値がある。さらに多彩な七夕飾りの学外公開は、地域の景観を昼夜にわけて彩り、非日常的な賑わいを現出する。学生の地域、せんげん台という地域、そして地域住民の背景にある地域を、作品を通して有機的に結びつけるという点で多角的で複層的な地域連携を実現した。

本プロジェクトの前段階である 2019 年度から 6 年間の学内公開・オンライン公開の取り組みについては、日本民俗学会第 76 回年会「教養教育としての民俗学：保健医療福祉系大学での実践から」（2024/10/27, 國學院大學）において口頭発表を行っている。本プロジェクトにおける取り組みについても日本民俗学会等で発表する予定である。この点で民俗学の学術的発展という研究面とも不可分に関連する。

④学生の主体的活動（アクティブラーニング）内容

本プロジェクトにおける学生の主体的学習活動は、学生が自らを軸として自己－家族－地域と gradual に視野を広げていく実践によって促進される。

具体的な要素としては、①地域の図書館、博物館、郷土資料館等での郷土資料調査、②親族・知人への聞き書き、③七夕飾りの製作・発表がある。これらの学習は、教室内でのペア・ワークや e-learning システム、地図アプリ等を通して、履修者同士で適宜成果を共有し、知的に刺激しながら進めるものであるが、基本的には履修者自身の実存に根差した主体的な実践である。こうした調査、発見、製作、発表、そしてその反響に触れることで、「私（たち）が資料である」（菊地暁 2022『民俗学入門』岩波書店:ii）という現代民俗学の実践を体験することが、本プロジェクトが直接的に促進するアクティブラーニングである。

また、この経験は、それぞれの専門や IPW などの学びの場面において、さらには職業人・市民として新たな地域に触れる際、その地域を主体的に理解する方法の獲得でもあるという点において、発展的・将来的なアクティブラーニングの促進にもつながるものでもある。

「得られた成果」

本プロジェクトは、せんげん台西口という地域に根ざした活動でありつつ、さまざまな地域が多角的複層的に結び着くことに特徴がある。七夕飾りに反映される「地域」一すなわち学生が調査し、学修した自らの身近な地域一は、せんげん台や越谷、埼玉に限らない。これらの七夕飾りを鑑賞することは、地域の人々が本学の学生がどのような地域を背景に持つのかを理解することにつながる。先述した、商店会の皆さんの「作品に取り入れられた民俗の読み解きが楽しかった」という声は、その証左のひとつである。埼玉県立大学を縁としてせんげん台に集う学生の多様性を表現する試みはこれまでなく、本プロジェクトは大学・学生と地域社会のつながりをより緊密にする可能性を確認するという成果が得られた。

また、作品の製作・発表という点での今年度の大きな発展は、電池式 LED ライトを全作品に組み込み、昼と夜で異なる姿を見せる七夕飾りを全員が作った事が挙げられる。とりわけ作品がライトアップされる夜の姿は、美しく、幻想的であるとの声が、学生や参加者から多く寄せられた。日常の通学・通勤路でもあるせんげん台西口地域を、七夕イベントを通して、非日常の空間を現出させたことは、年中行事や祭りを読み解く民俗学の概念「ハレ」を、さらには民俗な

るものが客体的なものではなく、自分たちこそが現在の民俗の主体であるという知的な気づきを、実感させるという学修効果が得られたことも成果である。

「現状の課題と今後の展望」

2025 年度の経験を踏まえた課題のひとつに、賑わいの活性化・広域化がある。イベントエリアの中央部は展示の密度が高く、賑わいの確かな創出があった。他方でエリア周辺部においては、その限りではなかったという学生の報告もあった。

本プロジェクトの発展的目的に、①学生それぞれの背景にある「地域」、②学びの場である「地域」（千間台・越谷）、さらには③地域住民のルーツや記憶にある「地域」の3つの具体的・抽象的な「地域」が混交し、豊かなつながりのネットワークを作り出すことがあげられる。そのためには、作品を通してより多くの民俗に触れることが重要であり、参加者をより広い地域へ誘導する仕組みが必要となる。この点については既に、商店会、学生ボランティアとの協議を進めており、スタンプラリー等の実施を検討している。併行して、作品と短冊と展示場所を検索できるアプリの開発を検討している。こうした回遊のしかけについては、本部プロジェクト責任者の研究蓄積がある「巡礼」の知見を生かすことで、更なる発展が見込めると展望する。

付記：本プロジェクトの実施にあたっては、上記に挙げた関係者のほか、とりわけ機材整備の面で、教養科目教務事務のお二人に大きく貢献して頂きました。記して感謝申し上げます。



2025 せんげん台七夕祭り×民俗学七夕ウィーク！ 学生製作の七夕飾りによる地域社会の非日常的な景観の創出